令和５年度　文教厚生常任委員会視察報告書

委　員　会　名	文教厚生常任委員会（委員長　橋本　竜一）
視　察　期　間　等	令和５年７月１２日（水）～令和５年７月１４日（金）
視察場所・対応者	（１）北海道科学大学（札幌市） 対応者　・研究推進・地域連携センター長　丁野　純男　氏 ・入試・地域連携部地域連携・広報課長　渡部　俊也　氏 ・入試・地域連携部地域連携・広報課主任　浅野　利恵　氏 （２）千歳市立北進小中学校（千歳市） 対応者　・校長　野澤　孝志　氏 ・教頭　鈴木　敦司　氏 ・千歳市教育委員会学校教育課長　下口　剛彦　氏 ・千歳市教育委員会学校教育課特別支援教育係係長 橋本　真弓　氏 ・千歳市教育委員会学校教育課特別支援教育担当主査 米内山　康嵩　氏 （３）安平町立早来学園（安平町） 対応者　・安平町議会議長　多田　政拓　氏 ・安平町議会事務局事務局長　木村　一雄　氏 ・安平町教育委員会教育次長　永桶　憲義　氏
視　察　項　目 （テーマ等）	（１）北海道科学大学と地域の包括連携に係る人材育成及び地域課題について （２）千歳市立北進小中学校における特別支援教育の取り組みについて （３）安平町立早来学園における専門家、住民及び教育委員会が一体となった学校づくりについて
視　察　委　員	橋本　竜一、中村　久、足立　計昌、遠藤　輝宣、須崎　和貴、本田　俊治、西田　浩一
視　察　内　容	別紙-1.2.3 のとおり
所　感	別紙-1.2.3 のとおり

別紙-1

令和５年７月 19 日作成
報告者 遠　藤　輝　宣

文教厚生常任委員会札幌近郊行政視察(R5.7 月 12 日から 14 日)

【視　察　先】　北海道科学大学
【対　応　者】　広報課長・副センター長・渡部俊哉氏、地域連携センター長・丁野澄男氏、広報課主任・浅野利恵氏
【視察日時】　令和５年７月１２日午後２時半から同４時半

◆視察目的
　根室市と地域包括連携を結んでいる北海道科学大学と人材育成や地域課題の解決について意見交換することを視察目的とした。
◆北海道科学大学との地域振興等包括連携協定
　北海道科学大学と根室市は、令和元年７月に「根室市地域振興等包括連携協定」を締結。その目的は相互発展のため地域振興などの分野で協力するとしている。発端は、同大学の出身の市立根室病院の薬剤師である岸本史也氏の仲立ちで、当地域で不足している学術的な知見を地域振興に生かすとともに医療福祉系などの人材の育成確保を目的とした。
　今回の視察では、事前に質問事項を提出。設問１の看護師をはじめ医療技術者不足が深刻ななか「学生の傾向として、働く場所や地域に対し、どのような希望を持っているか」につ

いて、渡部課長は「医療系は９割が道内に就職しているが、施設の充実した都市部に集中する傾向にある」とした。地域側として「今後どんな対策が必要と考えるか」との問いに、渡部課長は、生活環境の整備、給与面、学生がやりたいと思う業務内容、奨学金の活用、医療業務にじっくりと専念できる環境づくりなどを挙げた。一方、工学系は、地域の情報,
仕事が少なく東京などに流れる傾向にあると述べていた。

設問２では、他自治体と進めている優れた取り組みについて伺ったところ、１３０人が参加した新ひだか町の「スポーツ指導者や子供たちを対象にした「スポーツ医学講座」や猿払村で行った「開町１００周年ロゴデザイン・マーク作成事業」を挙げたほか、根室市で行った公開講座「まちかどｉｎ根室」も高く評価していた。

意見交換では、ロシア料理などに利用される「赤ビーツ」について丁野センター長から説明があり「ウクライナ情勢の悪化で提案した当時の様相が少し変わったが、ビーツ自体、食べる輸血と呼ばれるほど栄養価が高く、筋肉を増強させる作用を持つことからダイエット食や便通改善効果も期待される」とし、根室の気候環境など適しているのではないかとした。赤ビーツについては根室市産業クラスター創造研究会で試験栽培を行う予定で「畑作農家が少ないことから個人で行うのは大変。農協などとも連携しながら進めてはどうか」など意見を交換した。

このほか、ＩＣＴや自治体ＤＸ、GIGA スクールなどの研究や、今後の取り組みとして、大学側から３００を超える講座テーマ一覧表が提示され、効果的に連携協定を進めていくため「地元の課題を整理し、それに当てはまる講座テーマなどを示してもらうと取り組みやすい」（渡部課長）とした。また「共同研究は時間がかからず、比較的早く効果が出るものを選択することも重要」（同）などのアドバイスをもらった。

フリートークでは「宿泊施設を探すのに苦労している」との話も出て、観光産業の振興も含め、ホテル誘致などの課題も指摘された。

写真説明

１）渡部課長、丁野センター長から説明を受ける視察団

別紙-2

千歳市における特別支援教育について

日　時：令和５年７月１３日　１０：００から１２：００
場　所　千歳市立北進小中学校
担当者　千歳市立北進小中学校　校長　野澤　孝志　氏
　　教頭　鈴木　敦司　氏
　　千歳市教育委員会　学校教育課長　下口　剛彦　氏
　　学校教育課　特別支援教育係長　橋本　真弓　氏
　　学校教育課　特別支援教育担当　米内山康嵩　氏
記録担当　文教厚生常任委員会　本田俊治

○野澤校長より

・北進小中学校は、スペシャル教育、セパレート教育を行っている。
・一番近い特別支援学校は南幌町と距離がある。
・低学年の保護者は送り迎えができない。
・一番近いバス停が恵庭市であり、車のない保護者は子どもを寄宿舎に入れなければならない。
・小学校１年生、６歳、７歳から平日南幌町に預けることに抵抗がある親もいっぱいいる。
・そうした中での立ち位置として、様々な背景があり現況のスタイルの運営を進めている。
・子どもたちをみていただければわかると思うが、スペシャル教育ならではの良さがある。
・子どもたち１人ひとりに沿った個別最適な学び、その中で生まれる共同的な学び、そして、いじめ報告ゼロ、安心感がある。
・この様な北進小中学校の課題や良さをご覧になっていただきたい。

○下口学校教育課長より

・千歳市学校教育課の特別支援の体制は、主査職として現役の教員の方に道教委から来ていただき、各学校の特別支援の指導する立場を担っていただいている。
・主査職と事務の係長一名の体制

○小学部の授業参観　体づくり　説明　益山先生

・小学校には児童２５名在籍、４学級編成
・１、２組が高学年（４年生から６年生）の混合学級
・３、４組が低学年
・子どもたちの状況、相性等を判断しながらクラスを編成
・年々支援の必要な児童が増えている。（特別支援学校相当の児童も半数以上）
・教育課程・カリキュラムは当別支援学校のカリキュラムを参考に編成している。
・毎日３時間目は小学校合同の学習としており、毎日同じような日課にすることで、子供たちが見通しをもって行動しやすい環境。
・月・火・木・金は体育的活動でサーキット運動、動物の動きを模倣する動物歩きなど、水は音楽的活動で和太鼓・身体表現に取り組んでいる。
・児童の実態に合わせて取り組みやすい活動をおこなっている。
・今日の授業は、明日、千歳市内の東小学校との交流事業があり、その事前学習を行う。
・運動会で練習してきた「よさこい」を東小学校の子どもたちに披露するための練習。
・レクリエーション的に行うじゃんけん列車などのゲームも予定しているが、当日いきなりだと難しいので、事前学習のなかで取り入れて対応している。

○中学部の授業参観　中学部長　木本先生

- 中学部生徒２６名
- 小学部から上がってくる生徒もいるが、今年の１年生は１０名中７名が他校から。
- 千歳市も特別支援教育が進み、各学校で開設ができるが諸事情があり、北進を選ぶ親、生徒が多い。
- 不登校だったことを理由に北進に来る生徒もいる。
- 様々な事情に対応するような指導方法をとっている。
- 今日は、社会、理科、外国語、３つの教科を３グループに分けて同時にそれぞれの教室で行う。
- 中学部は３グループ

  一番高いクラス　学力的には小学校高学年あるかないかくらいの生徒　社会の地図

  真ん中のクラス　小学生ぐらいの学力の生徒　理科の動物

  低いクラス　コミュニケーションはとれるが、学力的にそこに届いていない、字を書いたり、何かを覚えて仕分けなどが難しい生徒　英語のジャンケンを
- 不登校対応として放課後登校などは、放課後教室の先生の協力を得たり、小学校、通級教室との連携により皆で働いているという実感がある。

○通級指導教室　通級指導教室について　林先生

・千歳市内の７校の学校から１１名のお子さんが通い指導を受けている。
・通常学級の中で困っているお子さんが通う場所。
・こまっている内容
　黒板を写すことができない。漢字が覚えられない。友達とトラブルになる。いやなことがあると手が出てしまう等色々な「困り感」のあるお子さんが通ってきている。
・「困り感」のもとは何かを考え指導している。
・一人ひとり「困り感」が違うので、個々に合った指導計画を作り指導している。
・通級支援教室の中で発達支援教室と名前がついているのは２校（北陽・北進）
・言葉の教室も２校（北陽・みどり）
・特別支援教室の利用者は増加傾向にある。
・はじめは北進のみだったが、ニーズに応じて北陽小学校にも開設されたという経緯がある。
・中学校の特別支援はまだない。これから検討。
・「困り感」のある児童が増えている。
・通常学級のなかで支えることの大切さ、重要性が認識されてきている。

○千歳市の特別支援教育について　特別支援教育担当　米内山　氏

※パワーポイントデータで説明（資料別紙）

１．令和２年１０月に改定された千歳市の特別支援教育の推進に係る基本方針について

・地域の拠点校に特別支援学級を設置、そこに通うスタイルから、各校に特別支援学級を置くよう方針転換をした。
・現時点で特別支援学級がないのは市内２５校中１校のみで、対象児童がいる学校には設置済み。
・勇舞中学校は、大きな中学校で特別教室等も多く物理的に特別支援学級が置けない状況
・北進小中学校は特別支援学級のセンター校（中心校）
障がいのある児童生徒の自立と社会参加に向けて、特別支援学級のみで構成された学校（昭和３５年スタートの学校・９年間の小中併置校）
蓄積された知識と経験、小中併置校の教育環境を活かした特別支援教育を行っている。
小学校は天真爛漫で自由な感じ、中学校はしっかり学習を行う。同じ学校のなかではあるが小中で色が異なる。
行事等は小中一緒に行い、中学生がリーダーシップをとったり、優しく教えてくれる環境
・令和２年１０月より居住地校に特別支援学級を整備
・通級指導教室の体制
小学校は対象となる児童数が年々増加しており、設置校を増やす方向で検討。
国より今後の方針が３月に示されている。
ここ 10 年、20 年で２倍、３倍に増えており設置校、受け入れ体制の整備に努めている。
国の方針である自校通級、巡回通級など学校に指導教員が行く仕組みも検討。
中学校は国の制度の動向や本人・保護者のニーズの把握に努めている。（現在は未設置）
ニーズはあるが、部活動の関係や違う学校に行くことへの抵抗、通級は親の送り迎えが必要なこと等課題もあるが、自校通級、巡回通級の検討が必要。
・通常学級や居住地校などとの交流及び共同学習を推進
北進は特別支援学級しかないので、自分の住んでいる地域の学校との交流を年一回実施。（希望者のみ）
・各学校の通常学級
コーディネーターを中心に校内支援体制を整備
要支援児童生徒への多様な教育ニーズに対応した指導支援を推進。
・就学前から卒業後までの一貫した支援を目指したい特別支援教育
就学前から卒業後（一生を通じた支援のために）まで、関係機関が個別の教育支援計画であるイエローファイルを引き継ぎ活用する体制づくりを行っている。
北海道は、令和５年から令和９年までの計画でイエローファイル１００％を目指すとしているが、難しいことから７５％程度の達成率を目標とし検討中。
・北進小中学校の児童生徒ヘルパー　小学校に１３名（手厚い配置）

その他の学校にも通常学級の中で支援が必要な児童のために、特別支援教育支援員など全体で１００名程度配置

・専門家チーム相談機能

中学校区に専門の相談ができる方、知識、経験のある方を配置し、窓口を明確にし、研修なども行っている。

２．千歳市の特別支援体制の変遷と北進小中学区の沿革について

・千歳市の特別支援体制の変遷

拠点校方式→ブロック制→全校方式による支援体制へ（令和３年度～）

・北進小中学校の沿革

昭和３５年４月　児童会館内に千歳小学校の分校として開設

※手をつなぐ育成会、知的障がいの親の会の運動、保護者ニーズからスタート

昭和３８年　　現在の校舎完成

昭和４６年４月　北進小中学校と独立した学校に

平成１８年４月　発達支援教室（通級指導教室）開設

令和３年１１月　開校５０周年

３．千歳市の特別支援教育の現状と取り組みについて

・千歳市の特別支援学級在籍者（令和５年５月１日現在）

小学校　１７２名（３．２％）、中学校７５名（２．８％）計２４７名（３．１％）

・通級指導教室利用児童数（令和５年５月１日現在）

小学校１３７名（言語通級１０１名、発達通級３６名）

普通学級にいながら必要な部分を通級で学ぶ（これからまだまだ増えると考えている）

※中学校の通級指導教室は現在未設置（ニーズはあるので今後どの様に折り合いをつけるかが課題）

・通級学級における特別支援を必要とする児童数の割合（令和４年１２月道教委実態調査）

小学校　児童数　5,１５１名　支援が必要と判断された児童数　４３０名（８．３％）

中学校　生徒数　2,５９５名　支援が必要と判断された生徒数　１３８名（５．３％）

※この調査のタイミングで国から８．８％という数値が示されている。

※本年５月、６月に２５校すべてにアンケートを実施した。

小学校１２％、中学校６％で１０％を超えてきた。

１０％を超えるお子さんが「困り感」を持っており、何らかの学校の支援を必要としている状況

学校現場の状況の変化、ニーズの多様化もあるなど大きな課題であり、学校も変わっていかなければならない。

・生涯を通じて途切れない支援
個別の教育支援計画であるイエローファイルに記録を累積、適切に引き継いでいく。

・千歳市の特別支援教育推進に向けた人材育成（４つのポイント）
① 管理職の特別支援教育に対する意識向上と学校運営における適切な位置づけ
７５％から８０％の管理職が特別支援教育の経験なし。
校長会の研修等の場でお話をさせていただいたり、特別支援教育に関わる学校巡回訪問指導を実施。
② 特別支援教育コーディネーターの専門性向上
コーディネーターは特別支援教育の「かなめ」であり、年二回の会議や研修会を実施。
③ 特別支援学級・通級指導担当者の専門性向上
特別支援学級担当者、通級指導担当者の会議を実施。
市内３校の通級指導教室の先生方と協力し複数回（５回を予定）お互いの学校を訪問し事例検討を行う取り組みも始めた。（令和５年度）
通級をやりたいという子どもが増えても指導できる先生、専門性を持った先生がいなければ指導はできないことから、専門性向上のための教育が必要。（危機感を持った取り組みを）
④ 一般教員等の特別支援教育に対する意識の向上
特別支援教育ハンドブックを作成。
特別支援教育研修会を実施（一度に１００名の先生方が参加）し、通級指導の先生のお話を聞いていただいたり、来年は作業療法士のお話を聞く予定もある。
この人材育成の目標を支えるため、特別支援教育担当主査や生涯教育相談による学校巡回訪問や相談等の実施、１５名の特別支援教育専門家チームによる教育相談・検査を行う。

おわりに
・特別支援教育の推進、人をどの様に育てるかが課題であり、形だけつくっても、人が育たなければ絵に描いた餅である。
・どうしたらやりやすくなるのか、どんな知識があればより良いのか、子どもたちが変われるのか、考えながら今後も取り組んでいきたい。

○北進小中学校の学校概要について　千歳市立北進小中学校　鈴木教頭

※パワーポイントデータで説明
・北進小中学校は自然に恵まれた環境
・開校５３年目
・知的学級、自閉・情緒学級の２つの学級で展開、小学校４クラス児童生徒２５名、中学校５クラス児童生徒数２６名

・全国的にも珍しい特別支援学級のみで構成された学校
・特別支援学校との違い
　先生の数　特別支援学校は６名に担任１名　特別支援学級は８名に担任１名
・児童生徒の半数が本来であれば、特別支援学校で教育を受けることが望ましいお子さん
・職員数の特徴　児童ヘルパー９名、生徒ヘルパー4 名がおり、千歳市のバックアップをいただいて配置。このヘルパーが子供たちの支援にあたっている。
　教員とそのバックアップをするヘルパー含め、教職員数は４２名。
・教育目標　「２１世紀を　自分のよさを発揮し　広く豊かに生きる子どもの育成」
　たしかに学ぶ子（知）、かかわりを持てる子（情）たくましく生きる子（意・体）
　こういった子ども像を目指していこうとつくられたもの。
・今年度の目標
　かかわりを通して学び、主体的に未来を生き抜く子どもの育成
　「かかわる」、「つなげる」、「ひろげる」三つキーワードを子どもたちが日常的に聞きながら、意識しながら生活していることが今年度の特徴。
　様々な場面でこの３つのキーワードが出てくるように取り組んでいる。
・系統性ある９年間の学びの推進
　小学校１年生から中学校３年生まで一貫した教育ができるのが特徴
　中学部、小学部の先生が一緒に研修を行っている。
　直近では、ICT 研修、働き方改革の推進等教育の質を向上させる取り組みを行っている。
　積極的な情報発信として毎日 Blog を更新している。（担当は校長先生）
　※１日1,５００件ほどのアクセスあり
　カリキュラムマネジメントの取り組み
　　教育相談を保護者の方々と何度も行う。その中で個別の教育支援計画・指導計画を見直しながら授業の改善に取り組んでいる。年間指導計画も都度見直している。
・学級、学部（各学科、行事等）におけるまずは「かかわり」づくり
　① できることは自分で
　② 思いを伝える機会づくり
　③ 何度でもチャレンジ
　④ がんばってできたことは大いにほめる
　⑤ 自己決定の機会を
　授業の中でただ単に教員が教え込むだけではなく、検索する場面を多く設定したり、子どもたちが何かを決めるという場面を設定し、自己有用感を与え、育つような思いで取り組んでいる。

・北進小中学校のグランドデザインについて
　学校の教育目標を達成するための仕掛け
　たしかな学びの構築、かかわり場面の創出、たくましさの伸長、教育活動を下支えする活動、この４つの土台、それらを達成するための仕掛けが書かれている。

先生方はこれらを常に意識しながら子どもの指導にあたり、様々な仕掛けを使って子どもたちが最終的に自分の良さを発揮し、中学校を卒業後も大人になってからも、豊かに生きられるようにと取り組んでいる。

・令和５年度の本校の研修
今年度は、主体的に未来を生き抜く子どもの育成で、情報活用能力を活かした、主体的、対話的で深い学びの授業の実践を行っている。
子供たちの中には、なかなか言葉をうまく使えない子どもがいるが、ＩＣＴ機器をうまく使いながら、自分の意思を伝えるようになったり、主体的・対話的に子どもたちが自ら勉強することで、子どもたち同士が「かかわる」、自分の考えを相手に伝える「かかわり」、相手の考えを理解する「かかわり」、そういう授業をやっていきましょう、授業を変えていきましょうということで研究事業に取り組んいる。

・北進小中学校
校区市内全域でほとんどの児童生徒がスクールバスで登校。
朝４方向からバスが出る。一部、保護者の送迎もあるが、徒歩の児童生徒はいない。
下校は放課後デイサービスの利用者が多く、各施設の迎えで下校、スクールバスの利用もある。
５月のいじめ調査結果は０件。調査には保護者の協力もいただいている。すべての児童生徒は保護者と共に記入。
先生方は、いつでもいじめが起きると認識して指導にあたっている。

・修学旅行の出発　全校生徒みんなで見送る。温かみのある学校。この学校の良さ。

・運動会の様子　小学校１年生と中学校３年生が一緒に競技し、自然と学校の様々な活動のなかで、また、小中色々な活動のなかで相手を思いやる気持ちだったり、小さい子どもたちのお世話をするなど、自然と育っていくようにすることも、本校の特徴の一つ。
中学校３年生の徒競走を小学生が見ている。→自分もああなりたいと目標・夢を持ってもらうことも、９年という長いスパンの中で教育活動を行っているメリット。
子どもたちだけじゃなく、小学校の先生方にとっても、普通の小学校の場合、中学生の様子が中々イメージできないが、本校の場合は同じ校舎にいることで１５歳の姿をイメージしやすい学校でもある。

・北進小中学校の一日　チャイムが鳴るのは２回
８：２５の一時間目のチャイムと１１：００の５時間目のチャイム
時間をゆったりと、チャイムに追われないように、子どもたちのペースに合わせるようにしている。

・北進小学校について

１時間目は自立活動　子どもたちは学習上の困難もあるが、生活上の困難を抱えている。着替え、ボタン一つとめるのに苦労する、着る作業、服をたたむといった作業に時間がかかる子ども、簡単にできるお子さんもいるが、それぞれに様々な課題がある。

課外活動だったり、色々な学習活動に取り組む。

肥満傾向の子どもも多く、「階段の昇り降りのトレーニングをしてみようか」と自立活動を１時間目に行っている。

２時間目、４時間目、６，７時間目は、教科の学習。国語、算数、図工、音楽、体育、生活等様々な授業を行っている。

３時間目は、体づくりや体育、週に２回音楽の時間がある。

体育館に集まり小学部全体で行う。

時間割が固定されていることで、子どもたちは見通しが持て、落ち着いた生活を過ごせるという良さがある。

５時間目は日常生活や遊びの授業。前半は給食の準備、給食指導。後半は昼休み、遊びの時間で、子どもたちが好きな遊びを選択（トランポリン、三輪車等）しながら、遊びの時間を過ごす。

小学部もICT 機器を活用しながら授業を行っている。（６時間目を過ごす）

・北進小学校の一年間

始業式・入学式は小中一緒に行う。

小学生入学式の記念写真、通常であれば椅子に座るとおもいますが、歩き始めるお子さんがいたり、なかなか落ち着いて写真が撮れないことから、アットホームな形で写真を撮る。

新入生を迎える会（初めて小・中併せて集まる会）

今年度は新入生の書いた絵を「何を書いたか」をみんなで当てるゲームで交流を深めた。

修学旅行　小学校単独で千歳市内で実施。保護者が子どもの様子をすぐに見に来れたり、迎えに来れるとう良さがある。

今後、どの様な形で修学旅行を進めるか検討中であるが、可能な限り現状の形で実施。

運動会　小中合わせて実施。デカパンリレーや「よさこい」などを行っている。

水泳学習　本校にはプールはないが、道路を挟んで向かいの北栄小学校があり、そちらを利用しながら実施。

フィールドワーク　交通機関の利用の仕方だったり、施設の利用の仕方の学びを通じて社会性を養うことが目的。５年生以上が参加。今年度は北広島のボールパークに行く予定。

買い物学習　低学年　近隣の商業施設に行き、買い物をして、お金の使い方を勉強したり、実施に買い物をしてお店の利用の仕方を学ぶ。

遠足　水族館へ　集団行動のルールを学ぶ。クラス単位ではなく縦割りの中で、６年生が低学年を引っ張っていくなど、６年生が中学生を見据えた形でリーダーシップを発揮する活動。

音楽　太鼓の活動を行っている。　月に１度、千歳の太鼓のグループに来ていただき、指

導を受けている。その発表の場として交流会を１０月に行う。
学芸発表会　中学生と一緒に太鼓の発表をしたり、本校はアイヌ教育も行っており、その中でアイヌの踊りを学び、学芸会の中で発表。
冬の授業　スキー学習を行っている。千歳市内のほとんどの小学校はスケートの授業。スケートになると、お子さんに負担がかかったり、体の不自由なお子さんもいることから歩くスキーをメインに取り入れている。
千歳市の様々なバックアップ、沢山のボランティアの方に来ていただき、授業に一緒に参加していただき、子どもたちの支援にあたっていただきながら、授業を進めている。
豆まき　中学生が鬼の役になったりしながら進めている。
氷濤まつり　小学校は冬の様々な行事に参加。校外学習として支笏湖の氷濤まつりを見学
卒業生を送る会　入学式、卒業式は在校生が参加していないことから、最後、みんなで見送り、お祝いしようということで、卒業生を送る会を行う。
卒業証書授与式・終了式　アットホームな雰囲気で卒業式を行う。式場で写真を撮ることは、なかなか他ではできないと思うが、北進ではそれができる。
様々な学校との交流　北栄小学校（となり）、駒里小学校や市内の特別支援学級同士の交流、居住地校との交流（希望者になるが、年に一度居住地校に行き、そこの通常学級や特別支援学級で交流）
今年度一回目が終わった。小学校１年生がいい顔で帰ってきた。（通常は体育の授業）

・北進中学校
社会見学　小樽水族館へ
卒業生の進路状況　通信制高校２名（不登校のお子さん２名）、千歳高等支援２名、白樺高等養護（北広島）１名、南幌養護　３名の計８名
日常生活の流れ
月・木は課題別グループに分かれ日常生活の指導
火・水・金は体づくりを。高等養護学校、支援学校に行くとかなり体力面が求められることから、日常的な体づくりが必要。
３年生は受験に向けて別メニューで行っている。
授業は、クラス単位の授業というよりグループ別にその都度、教室を移動して行う。
給食や昼休みは、体育館や外の公園で遊ぶ。
掃除をしたり、着替えをして帰りはバス、放課後デイサービス、家族の迎えで下校。
３時２５分には子供たちが完全に下校する。
部活動や生徒会活動を放課後に行うことはない。
教科指導　国語、数学各５グループ、社会・理科・外国語３グループ、作業・美術３グループ、体育音楽２グループ、自立活動３グループとそれぞれの能力、発達段階に分かれて授業を行っている。
教科別能力別に高いグループ、低いグループに分ける。
行事等　修学旅行は単独で行っている。２泊３日で旭川・富良野能面へ

３年生は現場実習（職業体験学習をイメージしていただければ）　卒業生は様々な作業所だったり一般企業に就職するが、その時困らないように、そのことをイメージして１週間の仕事体験をおこなっている。　※写真は７月の現場実習の様子。
１年生、２年生は様々な企業の協力を得て校内で体験学習・実習を行っている。
ソーシャルスキルトレーニングとして社会に出たときに困らないように、それぞれ学級ごとにフィールドワークに出かけたり、余暇活動（ボーリング）等を行う。

スタートカリキュラム　※別添資料あり

子どもたちが安心して生活して最終的に自立できるよう、保護者にも感じてもらいながら生活できるよう、入学前（２月）にこのスタートカリキュラムを保護者に配布し、本校入学後の取り組みを理解していただき、安心してお子さんを預けていただけるよう取りまとめたもの。
中学校にはアプローチカリキュラムという同じようなスタートプログラムがある。

発達支援通級指導教室　えがお教室　※現場視察しているので説明省略

青年学級　OB・OG の同窓会をイメージ

卒業後、色々なところと関わる機会が少なくなる。そういった卒業生を大切にしたいと思っている。５３年目の学校であり、校長先生より高齢の卒業生もいる。
運動会等学校の事業に参加して、色々な方と関わることを楽しみにしており、卒業生にも運動会の案内を送る。毎回２０名から３０名程度が見学に来られる。コロナ前は実際に種目に参加していただいた。
ボーリング大会も行っている。（個々の教員のお手伝いをいただきながら）

最後に良さや課題について

- 小学校、中学校が同一の校舎にあることが良さである。
  ９年間を見通した教育活動ができること。本校にとって大事にしていかなければならない点
  学びの連続性がすごく言われるが、実は５０年も前から取り組んでいた。
  児童生徒は小中合わせて５１名いて、同じ課題を持ったお子さんが凄く多いと思う。そのお子さん同士が関りを持つことができることが、実は本校の良さかなと思っている。
- 課題について
  独立校として行っていることが一番の課題
  通常級の児童との交流の機会が少ないこと
  通常級のお子さんと関わることの良さは分かっているが、中々その機会を持つことが少ないことが課題となっている。

本校の良さを知っていただきたく、長々と説明させていただいた。
この後なにかあれば質問いただきたい。

（質問事項）

千歳市の CS（コミュニティスクール）の取り組みについて

- CS は始めている。
- 学校運営委員に町内会の方々にかなり入っていただいている。
- 実は、この学校のある町内会の方々との交流をこれまでも盛んに行ってきている。
- ５月になると町内会の方々が鯉のぼりを持ってきて、実際にグラウンドに揚げてくれる。
- 過去には長寿会の方が来られ、子どもたちと昔の遊びで触れあうなど、地域の方々にかなり支えられながら、教育活動を進めさせていただいている。
- コロナ禍により様々な活動が停滞しているが、少しずつ、その活動を復活させるために町内会の方々と打ち合わせを進めている。
- 学校運営委員の中に町内会長さんもいる。
- どんどん町内会の皆さんに学校に来ていただき、運動会にも来ていただき、学芸会にも参加していただく等、かなり熱心に本校の教育活動を理解していただきながら進めている。

以上

別紙-3

文教厚生常任委員会札幌近郊行政視察(R5.7月 12 日から 14 日)

【視 察 先】安平町立早来学園
【対 応 者】多田政拓議長、永桶憲義教育次長（説明者)、木林一雄議会事務局長
【視察日時】令和５年７月 13 日午後２時半から同４時半

◆視察目的

根室市内の小中学校で義務教育学校化が進む中、震災からの復興を機に専門家、町民、教育委員会が一体となった「新しい学校を考える会」で議論を深め１中学校と３小学校を統合し、併せて公立図書館を併合した義務教育学校として令和５年２月に開校した早来学園の学校づくりを学ぶことを視察目的とした。

◆早来学園建設に向けた経緯

平成の大合併で旧追分町と旧早来町が合併して安平町（平成 18 年３月）が誕生。人口は 7348 人（令和５年６月末)。3000 人から 4000 人の大きく２つの市街地で構成されている。平成 30 年９月６日発生の胆振東部地震（震度６強）で、早来中学校校舎が甚大な被害を受け、地盤、校舎、体育館など危険なため移転新築を決めるとともに、他校舎（早来小学校、遠浅小学校、安平小学校）の維持管理を見据えた再編を前提に計画の策定に着手。復興支援に駆け付けた企業・団体（教育環境研究所＝IEE、アトリエ系の建築設計会社＝アトリエブ

ンク、デザイナーやアーティスト、プログラマー、数学者、建築家などで構成したテクノロジスト集団チーム Lab）など専門家や町民、教育委員会で「新しい学校を考える会」を組織。新しい学校のコンセプトとして「自分が世界と出会う場所」を掲げ、社会教育委施設である図書館も併設した学校施設に生まれ変わった。

◆視察概要

新しい早来学園は、敷地面積約 52,000 平方メートル、RC 作りと木造の複合構造の 2 階建てで、延床面積は 7,083 平方メートル。児童生徒数は前期が約 190 人、後期が 120 人の総勢 310 人となっている。

校舎は学校教育と社会教育施設を併設することで、社会教育施設で町民に開放する図書館に隣接し、キッチンスタジオ（家庭科室）、創作アトリエ（美術室）、300 人規模の中アリーナ、大アリーナ（体育館）を配置。ウエブから直接予約を入れるシステムを導入（授業優先で、授業などで使っていない時間帯を町民に開放）、教員の負担軽減を図っている。

教室には黒板はなく、ホワイトボードとプロジェクター（電子黒板・教室によっては前後 2 台配置）。一般的な学校の 2 倍はある広さの普通教室と教科教室。学年によってデザインの異なる教室内空間とし「９年間の旅」と表現していた。児童生徒の声も学校づくりに反映させたほか、教員の「働き改革」にも意を配った施設で、備品などについても吟味し、「ともすれば使えるからもったいないーと財政の査定で切られがちだが、思い切って最新の備品を導入した。この結果、より一層施設を効果的に活用できるようになっている」（永桶次長）と話していた。

同町は元々、昼夜人口比率が 105・９パーセントと近隣市町からの通勤者が多い自治体だったが、魅力ある学校を作ったことで町内に住宅を建てる人も増え、道内で最大規模の投資と言われる次世代半導体の開発、生産を目指す「ラピダス」の千歳市進出で人口流入の可能性が高まっているという。

なお、町民の施設利用状況は、6 月末現在で 2,121 人。児童館のイベントや予約方法（ウエブからの直接予約）を理解した人の利用が増え、6 月の利用者は 1,070 人と、浸透し始めているという。

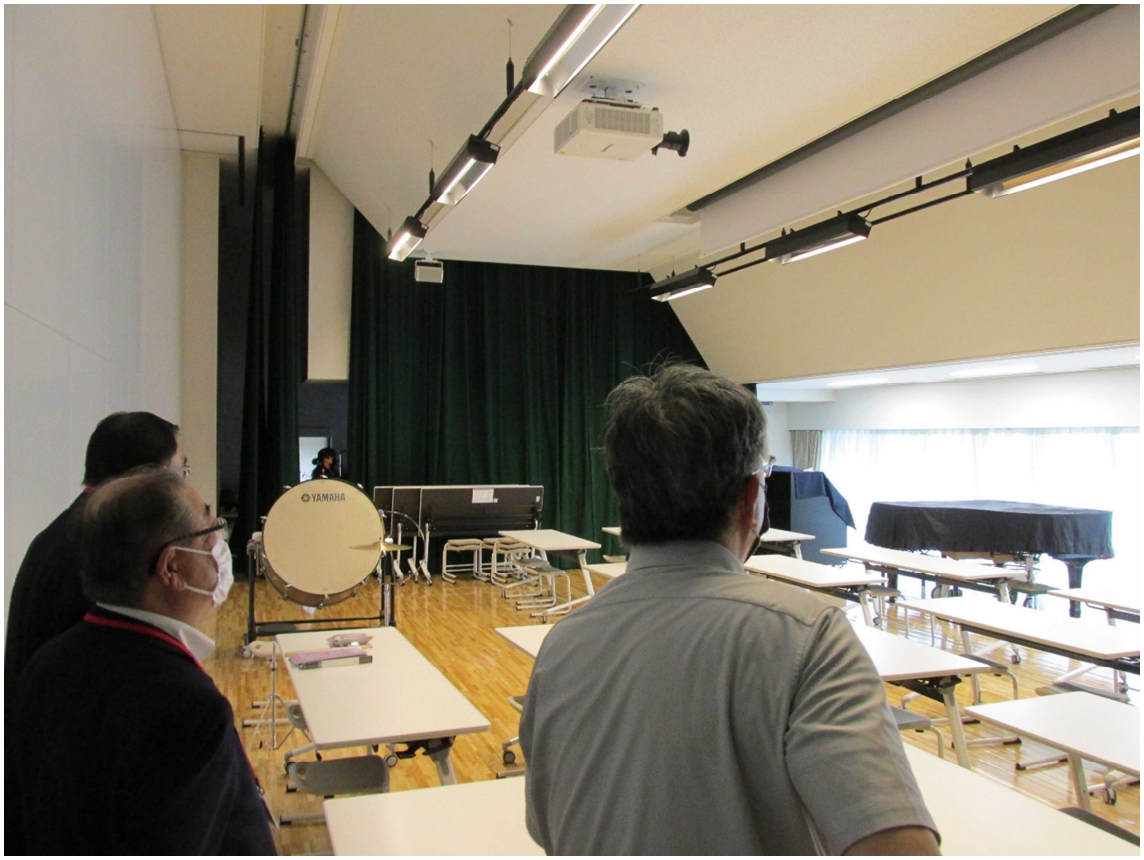
新しい校舎に対する児童生徒や教員の反応や評価については「使い始めは様々な感想を持った人の声を聴いたが、子供たちが実際に使い始めてからは、そのような声もなくなりました」（永桶次長）としている。

また、他の公共施設機能（図書館）と学校を一体化したことによる効果や課題について「行政の都合部分のあった図書館の併設ですが、子供たちに諸説に触れる機会を拡大させ、配置できなかった図書館司書の配置も可能になるなどメリットはあった」としたほか、活気のある活動が感じられる施設になったとし「定期的に行われる介護予防教室などで高齢者の活動がみられるなど、学校と地域がつながるきっかけになっている」（永桶次長）とした。

このほか、「施設の貸し借りについては学校が一切関知しないシステムを作り。違和感は

あっても仕事が増えるようなことはないと思っていますが、学校関係者には目に見えない大変な面があるかもしれません」（永桶次長）としたほか、図書館についても司書、事務員、コンシェルジュ（管理人）、清掃業者などの人員を確保したので学校側の業務負担は基本的には発生していないという。

写真説明（順に）
１）議長の歓迎を受けたあと、町教委の永桶次長が学校建設の経緯など説明
２）オープンスペースを活用した職員室
３）机の配置など自由度の高い普通教室
４）授業中でもギャラリーを町民に開放し、ウォーキングやランニングなどが可能な体育館
５）机を最新のモデルに更新し、一層機能的に活用できるようになったと説明を受けた視聴覚室
６）小さな発表会などに活用できる中アリーナ
７）中アリーナのステージは音楽室として利用可能
８）非常時には暖を取る機能となる図書館に設置された暖炉
９）出迎えていただいた多田議長（右から４番目）、説明をしていただいた町教委の永桶次長（右から２番目）


YAMAHA

平町立早来学